

---

# サトウ

あまつか比呂

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

サトウ

### 【Nコード】

N1297G

### 【作者名】

あまつか比呂

### 【あらすじ】

僕は、癌で入院した。それは良いんだけど、同室のサトウというヤツが気に入らなくて。

ここは、市民病院の病室。

二人部屋。

僕は、スナジマ。

「でもついてないですね。ただそんな人間も必要なんです」  
癌なんて、珍しい病気じゃない。

テレビで見たんだけど、人が八十五才までに生きるとして、女の人  
は、四人に一人。

男の人に至っては、二人に一人の確率だ。

つまり半分半分って事。

それでもまさか、自分が癌になるとは思わないじゃないか。

しかも僕は、まだ十五才だぞ。

あんまりじゃないか。

神さま。

「運命なんです。受け入れて下さい」

さつきから僕の隣で、ブツブツと呟いているのは、同室のサトウ。

サトウは、僕が入院するずっと前からここにいららしい。

病名は、誰にも言っていないらしく、不明という事だ。

隣の部屋に骨折で入院しているミツウラというオッサちゃんが教えて  
くれた。

そして、看護師は気を利かせてくれたのか、同じ年頃のサトウと僕  
を同室にした。

いや、でもそれは、いらぬお節介だった。

僕とサトウは、水と油だ。

絶対に合わない。

何故なら彼の性格の暗さは、僕のしゃくにさわるからだ。

だから入院した当初から常にベットとベットの間のカーテンを引いたまま、

僕はサトウと顔を合わせないようにしている。

それにしても入院してから、ただ一人として、見舞いが来ない。

親はもとより、兄弟、友達の誰一人として。

なんでなんだろう。

癌だから僕が落ち込んでいると思って、気を遣っているのかな。

でも僕の癌は、早期発見で命に別状は無いという事らしい。

だから短い入院生活だ。

後々の事も考えると誰も来ない方が気が楽で、良いけど。

ただずっとサトウと二人つきりじゃ息が詰まって、たまには気分転換もしたくなる。

「ふふふ。死のが怖いですか。

でもそんなに気を張る事はないですよ。今に分かる」

「うーか、サトウ。お前、ウザイ。

僕は死なないんだよ。

僕はサトウを嫌っている。ヤツもそれを知っているはずだ。

それでもサトウは、何が面白いのか、ブツブツと話しかけてくる。

そしてサトウのいう事はいちいち的を射ていて、言い返せないから余計に頭にくる。

しかし何も分かっているのは、ヤツだ。

俺は癌という死ぬかもしれない病気で不安なんだよ。

「死ぬのは怖いですか」

当たり前だ。

死ぬのが、怖くない人間なんているのか。

久しぶりにサトウに反論できる余地を見つけた。

これ幸いにと、反論しようとした時。

「僕は、怖くないですよ。  
人間は、生まれたら遅かれ早かれ必ず死ぬんです。後は時期の問題だけ」

どうやらサトウは、死ぬのが怖くないらしい。  
そんな人間いるのか。

とにかく俺は、また反論の機会を失った。  
というか、サトウも死を目の前にした病気を患っているのだろうか。  
そう思ったら、ちょっとだけサトウが哀れに思えてきた。

「ふふふ。死んだ後、人間はどうなると思います。  
分からないから不安なんですよ」

図星だ。

だからといって、サトウも死んだ後の事を知ってるとは思えない。

「いえね。僕は知ってるんですよ。死んだ後の事」  
え。そんな馬鹿な。

サトウは、こんな馬鹿げた事を言うヤツじゃなかったはず。

「ミツウラさんというオジさんがいるでしょ。あの人に聞きました。  
死んだ後の事」

ミツウラさん。

骨折で入院しているあの人か。あの方は、ただのオツちゃんだ。

サトウは、オツちゃんの戯言を信じているのか。

「ふふふ。信じられないでしょうね。でも、僕は信じています。なぜなら、」

サトウは、そこで言葉を止めた。そして嗚咽が漏れてきた。  
もしかして、サトウは……。

「そう。僕の命は、もう終わっているんです。」

もう死んでいるんですよ。一緒の部屋にいて気づきませんでしたか」  
やっぱりだ。

サトウは死を目の前にした病気を患っているんだ。  
そして、すでに死んだ気にいる。

僕は、サトウが嫌いだけど、元気出せという言葉くらいは言いたい  
気分になった。

「今、君が思った事。全然、的を射てないですよ」  
でも泣いているんだろう。

「その前になんで見舞いの人が来ないか分かりますか。  
最近、看護師や医者を見ました？」

サトウの嗚咽が止まった。

同時に不思議と空気が凜と張り詰めた。

サトウは、何か大事な事を僕に言おうとしているようだ。

「それは、僕を見れば分かる。君は重大な事を見落としているんで  
す」

なんだ。何が言いたい。

「君も僕も幽霊なんです。そして、ミツウラさんは、幽霊と話がで  
きる人なんです。

君は僕をサトウと呼んでいる。

でも違う。僕はサトウじゃない。そして、君の名前は……」

僕の名前は、すなじま砂島。  
だからなんなんだ。

「砂島くん。サ・ト・ウ。そうサトウとも読めるんですよ」

僕は、思い切って、サトウのベットと僕のベットを仕切っているカ  
ーテンを開けた。

そこには、冷たくなったサトウがいた。

サトウは、すでに。

そして、サトウの肉体には見覚えがある。

「そうです。僕は君の肉体。脳死で運び込まれた君の肉体」  
馬鹿な。

僕は、すでに死んでいたのか。

でも僕の癌は早期発見で、命に別状はないって。

「ふふふ。勝手に都合の良い記憶を作り上げる位、君は死ぬのが怖いのですか」

サトウ、了。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1297g/>

---

サトウ

2011年10月5日18時18分発行